

三條別院のご案内

三條別院に想う

私が入寺したての頃、先代住職から、三條教務所へ行ったときは「まず御堂の阿弥陀様にお参りしてから、教務所へ行くように」と教えられました。しかしながらこのごろは、会議の開始時刻ギリギリに到着し、会議室のお内仏に頭礼だけして入室することが多くなっています。別院の阿弥陀様を素通りして、ただ自分の用事を済まして帰ってきているようです。大いに反省しているところです。

先月の教務所での会議は、ひさびさに余裕を持って到着したので、御堂で「本尊にお参りをいたしました。内陣の仏花など綺麗に整えられて給仕された荘厳に感じました。職員の方々の日々のお仕事に感謝いたします。

三二〇年前に越後の米山以北の本山の真宗拠点として建立されて以来、柏崎から村上にいたる五〇〇カ寺に及ぶ寺院とご門徒たちの念仏求道の道場として歩んできた別院の年表を拝見しました。特に明治の本山両堂再建と三條大火で焼失した別院の再建と度重なる大事業を支えた先人達、御同行の方々のご苦勞とご懇念の篤さに頭の下がる思いをいたしました。

別院では「ご命日の集い」や「定例法話会」など様々な聞法の方が開かれています。参加はどうしても近在のご門徒です。少し離れた門徒にとりましては、別院は遠い存在かもしれませ

ん。
十組では三年に一度、推進員養成講座を開講して、前期講習に必ず別院での一泊研修を組み入れることにしています。「ちかきところ、御開山様の御座候ところ」としての三條別院にお参りし親鸞聖人のみ教えに出遭う研修になればと願うてのことです。

以前この紙面で、「別院が今問題としていていることは、そのまま私たち一般寺院の問題となっているものばかりである」という指摘がありました。私も同感です。同様な課題を持って、これから別院と関わっていきたく思います。

(第十組 西方寺 桑田 正栄 氏)

○次回の「三條別院に想う」は、

齊藤 亮 氏 (第十五組 正薬寺) より

「ご執筆いただきます」

■定例法話 新年度第一回開催！

教区御遠忌スローガンに「おめさん、そろつと参ろうて！」とあるが、参るべき聞法の座が無い。ある会議で漏れた言葉です。三條別院では、そん

な声に応え、本年の三月より、三條別院で一番古い建物である旧御堂を会場に「別院定例法話会」を試行してきました。幸いに多くの方に参詣していただき、ぜひ継続をという声が多く聞かれ、この七月より毎月十三日、前門首の命日に法話会を行うこととなりました。なお、『御文』四帳目十二通の表記に従って「両度の御命日」とも呼んでいます(下記の案内参照)。

新年度を迎えて一回目は、講師に荒瀬原有之氏(第十五組蓮照寺)を迎え、お話をいただきました。折しも七月十三日は、二〇〇四年に三條を集中豪雨が襲った日であり、五十嵐川、刈谷田川が破堤して、甚大な被害があったことは記憶に新しいことです。川沿いにある蓮照寺は、他で堤防が切れたために、危機一髪で水害を免れ、「よかったと安堵してはいけな」と感じながらも、安堵している自分がいた」との告白を交えた思い出を語られました。話の中心は、この度の東日本大震災に移り、良寛は三條地震に際し、「災難に逢う時節には、災難に逢うがよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候」と語り、自分も御門徒にその話をしたのだが、しかし、事実を事実として受け止めるということは、非常に困難なのだ、と感情が高ぶり口ごもる場面もありました。今回の災害はなおさら、「そういうものだ」と頷けるような自然災害でなく、放射能汚染という人災であ



【歴史ある旧御堂での法話】

り、人間の中に本来ある願いを聞きながら、この事態を受け止めていければと結ばれました。多くの方が気楽に寄って、法話を聞きながら静かに考え事ができる。そんな聞法会となることが願われています。お待ちしております。

■お取り越し報恩講のポスターが出来ました！

今年も三条別院お取り越し報恩講が十一月五日(日)～八日(木)にかけて厳修されます。

昨年は「三条教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け法要」と兼修という形で執り行われ、沢山の参詣を頂きました。この「お待ち受け」の意味を考えてみると昨年の法要だけのことではないと思われまます。御遠忌を「待つて」、しっかりと「受ける」。来るべき「教区御遠忌」を迎えるまでの大切な御門徒の心持ちではないでしょうか。

さて、その二〇一一年のお取り越し報恩講のポスターが完成致しました。昨年同様、デザインには十九組長養寺 島津晃氏にご尽力いただき、テーマカラーとして昨年から一貫した緑を採用しました。多くの方と聖人の教えに触れるご縁をともに頂きたいという願いを込め、多くの方にご覧いただき、参詣いただくことをお待ちしております。



【お取り越し報恩講に、そろつと、参ろうて！】

■御命日(二十八日)の集い

宗祖親鸞聖人の御命日であります毎月二十八日に、「御命日の集い」を本堂にて、日中法要と法話その後、座談会の場を開いております。

どなたでもお参りいただけます。皆様のご参詣をお待ち申し上げております。

なお、前日(二十七日)はお速夜法要を、午後一時三十分よりお勤めをしております。

【八月二十八日(日)】

午前十時 お勤め(御命日 日中法要)

文類偈 行四句目下

念仏讚 洵五

和讃 回口 次第六首

回向 願以此功德

◎今月の法話講師

村山 まみ 氏 (真宗学院第一期卒業生)

◇今後の講師一覧

九月 井上 知法氏 (第十三組 願性寺)

十月 草間 朋哉氏 (第十二組 勝覺寺)

十一月 竹内 淳一氏 (三条教務所 主事)

十二月 関根 正隆氏 (第二組 長徳寺)

■定例法話会のご案内

前述の記事でご報告いたしました通り、毎月十三日は、「両度の命日」と呼ばれている前門首のご命日です。また、蓮如上人も『御文』の中で、こ

の「両度の命日」についてお書きになられています。(四帖目十二通)

三条別院の一番古い建造物である旧御堂で仏法に触れるひと時を味わいませんか。

皆様、お気軽にお越しください。

◇日時 毎月十三日 ※八月、一月は除く

午後一時三十分より(約二時間程度)

◇場所 三条別院 旧御堂

◇御講師

九月 溝口 敏磨氏 (第十五組 覺満寺)

※十月以降の講師につきましては、後日ご案内させていただきます。

■朝の人生講座・夏の御文拝読

本年も左記のとおり朝の人生講座・夏の御文を開催いたします。

清々しい朝のひと時を仏法に触れながら三条別院で過ごしてみませんか。

◎人生講座終了後、簡単な朝食をお配りします。

◇日時 八月十九日(金)～二十二日(月)

午前六時 晨朝 夏の御文拝読

午前六時三十分 人生講座

◇場所 三条別院本堂

◇御講師

十九日 窪 智至氏 (第二十組 常明寺)

「家の常識は世間の非常識」

二十日 安原 陽二氏 (第十二組 安淨寺)

「皆、仏になりたいと願っている」

二十一日 藤波 龍英氏 (第十八組 西入寺)

「蛙の鳴く音も鐘の音も」
かむす ね

二十二日 安富 信哉氏（大谷大学教授）

「帰依三宝」

■同朋会館に宿泊される方へお願い

同朋会館に宿泊される方は、同朋会館一階事務所にございます宿泊者帳に記帳していただき、シートクリーニング代としまして、五〇〇円いただいております。

また、翌朝七時より本堂にて晨朝が勤まりますので、お参りいただきますようお願い致します。

■三条別院巡回について

かつて三条別院の御影をお迎えし、各ご門徒のお宅で聞法会が頻繁に行われておりました。しかし、時代の流れや、世代の交代で今では教えるほどこに行われていません。

ご門徒の皆様をはじめ有縁の方にご案内いただき、三条別院御影巡回がより多くの方々のお念仏をいただける場となるご縁となりますことを、願っております。

※曜日・時間等は昼夜問わず、皆様のお仕事の後などご相談させていただきます。

■別院奉仕研修について

先達の篤き御懇念によって護持されてきました三条別院にお越しいただき、その歴史に触れていただくとともに、現代の様々な問題を抱える私たち、真宗門徒として親鸞聖人のみ教えに出遇うことを通じて、ともに語り合い、人間として生きる意味を尋ねていく場となることを願い、奉仕研

修会を開いてみませんか。

○日程及び内容について、ご要望等ございましたらご相談承ります。

○奉仕研修会をお申し込みいただく方(団体)へ、冥加金としまして左記のとおり頂きます。

◎冥加金

- ・日帰り 一、五〇〇円
 - ・一泊二日 二、五〇〇円
- ◎食事代(昼・夕食は業者発注のため)
- ・朝食代 五〇〇円
 - ・昼食代 一、〇〇〇円程度
 - ・夕食代 一、三〇〇円程度

■報告

この度、三条別院書記、齋木浩一郎・松浦武馬が列座見習の兼務を拝命しました。任務の重さを噛みしめて日々精進していきますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。

■訃報

去る七月十七日、元別院職員細川常德氏(高山教区第一組蓮乗寺前住職)が浄土へ還帰されました。行年六十七歳でした。細川氏は、二〇〇九年四月より、別院の列座指導として着任し、後進の育成に勤められました。体調を崩されて退任されてからも、毎年の別院報恩講にも足を運んで頂き、立華を中心とした荘厳の指導を頂き、また常に三条別院並びに別院職員のことを気にかけてくださいました。細川氏の精神を引き継ぎ、職員一同、別院の崇敬護持に勤めていきたい所存であります。

◇◇編集後記◇◇

七月十九日、細川常德氏の通夜に参列させていただきました。会場は、高山別院。

彼と接した方は、多分こう思われるはずである。「いつも笑顔で人と接し、低姿勢で、他人のことをいつも心配し、気にかけてくれる方」。

その人柄のせいであろう、会場には溢れんばかりの人が参列していた。

その通夜の導師・法話を勤めた方が三島多聞氏(高山教区高山一組真蓮寺住職)である。その法話で、細川氏はいつも別院のことを想っていて、会議の中でも「もう少し別院のことを考えてくれんか」と発言し、また三島氏が高山別院の列座として勤めていた頃、声明の善し悪しではなく、お勤めをする姿勢について叱られたとおっしゃられていた。

この法話を聞かせていただき、涙が止まらなかった。三条でも一緒ではないか。彼から学んだことは崇敬の中心である別院への奉仕の心、そして列座の心得。

また、ある組で開催した立華講習会で講師として呼ばれた時、彼は参加者にこう告げた。「皆さん一生懸命立てましたか。」「ならば百点です」と。立華の出来栄えではない。立てる意義、心構えを彼は伝えたかったのではないだろうか。

儀式作法は、決してただの形式だったものではない。南無阿弥陀仏に出遇わせて頂いたことへの報恩感謝が、儀式となって顕れるのではなからうか。